

「コロノスコーピー」

Mount Sinai 医科大学教授 新 谷 弘 実 著

癌研究会附属病院内科

丸 山 雅 一

私は、1982年に本書のオリジナルである英語版が出たとき、既に、これに目を通して、その内容の理解については、英文であることもあって、果たして自家薬籠中のものとなしえたかどうか、正直言って自信がない。今回、この本の日本語訳が出版されて間もなく、これを読む機会があった。

この本の心臓部を構成しているのは、ファイバースコープの挿入法と生検・ポリペクトミーに関する所だから、本書の第10章“大腸の内視鏡診断”、第11章“腫瘍性隆起性病変”、第12章“その他の悪性病変”の3章は蛇足である。むしろ、そのために本書がセミナーのテキストの域を出ないかのように見える。ましてや、絵の質にこだわる日本の読者には、それが香港製と断りがあっても、色のバラツキと焦点の甘さが不満として残る。

そもそも、技術解説を主眼とした記述は、著者がいくらその体裁と格調を気取ろうとしても、セミナーのテキストのノリになってしまうものである。また、そうでなければ、実技解説の臨場感が読む側に伝わらないのも道理である。

先に蛇足と言った3章と丁度同じ

調子で書かれているのが、第7章“コロノスコーピーとX線検査”である。著者は“X線検査に対して偏見を抱いてしまう”と言い切るのだから、自身のポリープの見逃し率くらいは堂々と発表してこそ世界の新谷の名に相応しいし、この人ほどの経験があってこそ、失敗も教訓として世に残す資格がある。

米国の放射線科医に友人の多い私としては、彼らの内視鏡医に対する怨念みたいなものを代弁するようになってしまった。そうは言っても、私には、新谷自身が、“2つの検査法は互いに補足的な役割を果たしている”との認識があるのだから、優れた内視鏡医の下には有能な放射線医が育つ、といった状況もこの人なら可能なのではないかと期待がある。米国という熾烈な競争社会を生き抜いて今日を築いた日本人である著者だからこそ、大腸の内視鏡診断、更には大腸疾患へのアプローチに transcultural な手法を用いてくれたら、という思い入れが先に立ってしまう。X線診断にしろ、内視鏡診断にしろ、消化管について1980年代になされた日本の仕事は、欧米のそれに勝るとも劣らないとの自負もある。

新谷が日本のコロノスコピストに与えたインパクトの大きさは測りしれないものがある。これは事実として受けとめなければならない。そして、新谷の直弟子と自他ともに認める岡本平次は別格としても、新谷とは一見無縁のごとき名人光島徹ですら、間接的にはその影響を受けていることは否めないだろう。そしてまた、コロノスコーピーの歴史を語るのであれば、松永の遺産を一身に背負っている田島強の存在を避けて通ることはできない。著者の米国的プラグマティズムに異を唱えるつもりはない。しかし、われわれは、それを認める認めないにかかわらず、意識下には歴史の重みを引きずっているものである。言い方を換えれば、セミナーのテキストのノリと歴史の中に自分を位置づけようとする自己主張の場は意識して使い分けるべきではないだろうか。

今や、コロノスコーピーの技術は、厳しい修行の果てにのみ到達できる悟りの境地ではなく、マニュアルで学習できる時代になった。そして、それを可能にしたのは、ひとえに新谷の功績である。本書の価値は、新谷が果たした歴史上の役割を評価して初めて納得がいくものであり、その意味で、これはコロノスコーピーの手引書として疑いもなく一級品である。最後に、私は、近い将来、新谷が、その前人未踏の体験を踏まえて、内視鏡治療学の神髄を改めて世に問うことを期待する。

B5判変型 246頁 1989年

定価 18,540円(税込)送料 300円

医学書院 刊